校長先生の初恋物語

第16話　がんばれとっくん

「足長君、いいかげんにしてくれよ。」
気の弱いとっくんが、はじめて大きな声を出します。足長君の向こうに見えるダンプさんは、とっくんのそんな姿に「よしよし。がんばれ。とっくん。」と励ますような感じで笑っていました。そんなダンプさんと目があって、とっくんは勇気がわいてきました。でも、にっくき足長君は、とっくんの言葉にどうじません。
「へー。弱虫とっくんでも、そんなこと言えるんだ。そもそも、とっくんがカールのチーズ味なんかプレゼントで持ってくることがいけないんだろ。そうだろ、みんな。」
周りの男の子たちが「そうだ、そうだ。」と、足長君といっしょになってとっくんをせめてきます。
　足長君は、背が高くて、スポーツマンで、勉強もよくできて、マンモス小学校のアイドルです。足長君は学級委員で、みんなからしんらいもあります。足長君はたよりになるところも、いっぱいあるんです。だから、足長君は男の子からも女の子からも人気があります。そんな足長君にはむかうということは、へたすると、みんなからムシされてしまう可能性だってあります。だから、足長君が時にはだめなことしても、だれも何も言えないんです。それを弱虫とっくんがしようとしてるんです。
「足長君は、どうして、ぼくばっかりいじめるんだ。もしかして、よしこさんとなかよくしているのが気に入らないのか。やめてくれよ。」
その言葉は、かなり足長君にきいたようです。足長君の顔はどんどん真っ赤になっていき、おこりだしました。その通りのところをストレートにつかれたからです。
　教室のみんなはだれもしゃべらなくなりました。みんなが、とっくんと足長君の言い合いに注目しています。

　足長君は、真っ赤な顔をしながらも、とっくんをばかにするような言い方はやめませんでした。弱虫とっくんから、何を言われても気にしないという感じでした。

　とっくんは、うしろをふり返り、よしこさんを見ました。よしこさんはしんぱいしている感じでしたが、「とっくん、がんばれ。」と応援してくれているような顔に見えました。さらに足長君の後ろにいるダンプさんも、「がんばれ。」とエールをおくるように笑っていました。
「足長君は、みんなから人気があるけど、いくら人気があっても、人をバカにするのは最低なことだよ。」
しんぞうはどきどき、わきの下は汗だく、それでも言い続けました。
「どんなことでもできちゃうし、なんでもぼくに勝てると思ってるからばかにするのかもしれないけど、ぼくにだって足長君に勝てるものがあるよ。」
そのしゅんかんです。足長君は目を開いて、きゅうに声が大きくなりました。
「はっはっはーっ。とっくんがぼくに勝てるもの、それってなに？勉強かな？運動かな？なんなら勝てるって言うのさ。さぁ、言ってみろよ。」
あわてて頭の中でさがしました。でも、うかびません。そりゃそうです。足長君に勝てるものなんて、足の短さぐらいです。

「さぁ、とっくん、だまってないで、教えてよ。とっくんが、ぼくに勝てるものって、なんだよ。さあ。だまってないで、言ってみなよ。いくらさがしても、ないんだろ。」
にくたらしい足長君の言い方に、とっくんはおもわず言ってしまいました。
「ぼくが勝てるものは・・・。」
その後、とっくんが口にした一言で、教室にいたみんなは大笑いとなりました。
つづく

次回予告　足長君に勝てること